

元隊員に聞く

自分の世界を広げたいと
思っていた 佐野智行

わたしは、本川根で国体カヌー競技が開かれたとき、警察官として会場の警備を担当しました。そのとき「ここにぜひ住みたい」と思い、配属の希望を出しました。希望が叶って、奥泉派出所に配属されたんです。

えつろう
益井悦郎さん (青部)

協力隊経験者の益井さんと佐野さん。この2人に実際に現地でどんな活動をしてきたのか聞いてみた

ともゆき
佐野智行さん (奥泉)

わたしは以前、東京でエンジニアの仕事をしていました。その経験を活かしたいと常々考えていて、平成8年に青年海外協力隊に参加しました。派遣先は、ガーナの小さな村。入村時、住民総出で歓迎してくれたのを覚えています。現地では、文化も生活も想像とはまったく違いました。主食はキャッサバ。移動手段は主に路線バス。時間が合わないときは、徒歩で村を回ることもありました。

し、悩んだこともたくさんありました。今、協力隊を経験して思うことは、小さなことは気にならなくなったということです。また、外国への恐怖心のようなものもなくなりました。現地でも、さまざまな経験を積んだことで、精神的に強くなったんだと思います。警察官は、地域の安心・安全を守る大切な仕事です。その地に貢献するという点では、協力隊も警察官も同じ。協力隊の2年間は、自分にとって大きなプラスになっています。

アフリカ最貧国は、人生の楽園だった 益井悦郎

わたしは、セネガル共和国コルダ県庁で農業指導(地域開発担当)を中心に村づくりを一人ですてきました。活動のほとんどは電気も水道もない、まさしくテレビで見るとまのアフリカ最貧国の村の中でした。そこには止められぬ砂漠化という厳しい自然の中で、貧しくとも人間らしく、

ガーナ共和国
西アフリカに位置する共和制国家。東にトーゴ、北にブルキナファソ、西にコートジボワールと国境を接し、南は大西洋に面する。首都はアクラ。ダイヤモンドや金を産出する。カカオ豆の産地としても有名。

セネガル共和国
西アフリカ、サハラ砂漠西南端に位置する共和制国家。北東にモーリタニア、東にマリ、東にギニア、南にギニアビサウと国境を接し、ガンビアを三方から囲んでいる。西は大西洋に面している。首都はダカール。

意義を考える

青年海外協力隊が展開する国際協力活動その向こう側に見えるものとは一体何なのだろうか――

協力の形は千差万別

青年海外協力隊は、知識や技術を必要とする国々に人材を派遣し、その地域で協力活動を展開する事業です。小さな村で技術を指導する隊員もいれば、大学講師として勉学を教える隊員や、役所に入って仕事を教える隊員など、活動の内容は千差万別です。「隊員になりたい」「応募したい」と考えたとき、一番の不安は「言葉の問題」だと思います。派遣が決まった隊員たちは事前研修を受けますから、ある程度は大丈夫。でも実際のことを言えば、現地に入ってしまったら、言葉の問題



青年海外協力協会中部支部 (元隊員) 佐野明子さん

なんて小さなことなんです。もつといろいろな課題や問題が目に見えてきますから。それに、言葉が分からなくても何とかなるものです。通じたいと思う気持ちがあれば、現地の人たちとコミュニケーションすることは、何も難しくありません。

経験が人を成長させる

どの隊員も、協力隊を経験

して一回りも二回りも大きくなって自分の地元に戻っていきます。帰国した隊員の中には、地元に戻ったあと、地域づくりに励むようになった人も大勢います。藤枝市の元隊員は、実際にまちづくりのリーダーとなって、町を良くしようとして奮闘中です。現地の人々と向き合い、さまざまな課題に対処してきた経験が、人を大きく成長させるのでしよう。協力隊の活動は、「人づくり」にもつながるものだとおっしゃいます。帰国後隊員たちが、どんな道に進むにせよ、必ず大きな財産となって、その後の人生に活かされることでしょう。

JICA
青年海外協力隊「考」



帰国した隊員たちのレポートを読むと、「国際協力を通して、自分も教えられることがたくさんあった」と話す人が実に多いことに気づく。多様な文化や習慣に接し、言葉が通じない人々と毎日を共にする。いっしょに課題を考え、解決のために努力する。そういった経験を通して、互いが互いを認め合う、人と人が支えあう精神が養われていくのだろう。そして、貧しくても生き生きと、笑顔で毎日を送る人々の姿に教えられるのだ。「本当の豊かさとは何か?」「本当の幸せとは何か?」ということ。

「帰国した隊員たちは、地元で地域づくりのリーダーになった人も多い」と、元隊員の佐野明子さんは言った。昭和56年にセネガルに派遣された益井さん、平成8年にガーナに派遣された佐野さん。世代も派遣先も全然違う2人だが、現地ではぐくまれた精神はたぶん同じなのだ。「誰かの笑顔のために頑張ろう」とするボランティア精神は、相手が世界の国々であっても、自分が住む地域であっても、何ら変わることはない。

「国際社会への協力」というフィルタの向こう側に見えた、「自分自身を、自分が住む地域を、見つめ直そうとする心」。

益井さんはまちづくり活動に心血を注ぎ、佐野さんは今日も、地域の安全を守るためパトロールに出かける。

青年海外協力隊の精神は、今日も確実に、この町に息づいている。

特集 「協力」の向こうがわ 終